

【ポスターセッションの場合のみ記入 9pt 明朝・左端揃】

主題：認知症高齢者支援システムにおけるセルフヘルプ・グループの機能と可能性

一副題：—韓国認知症家族協会と公益社団法人認知症の人と家族の会の合同による活動史—

○ 九州看護福祉大学 氏名 福崎 千鶴 (会員番号 6859)

キーワード3つ：認知症高齢者・セルフヘルプ・グループ・ソーシャルワーク

1. 研究目的

厚生労働省研究班の調査によると、2012年時点で、認知症高齢者は65歳以上の15%を占め、約462万人と推計されている。軽度認知障害(MCI)と呼ばれる人は、約400万人と推計されている。2012年には、65歳以上の高齢者の約7人に1人(有病率15.0%)が認知症であったが、2025年には、約5人に1人になるとの推計もある。また、85歳を超えると3人に一人、90歳以上では過半数が認知症という研究結果もある。

一方、韓国の高齢化率は、1980年には3.8%、2000年には7.2%、2010年には11.0%を超え、2018年には14.3%、2020年には15.6%になると推計されている。韓国の認知症患者の総数は、2005年で約40万人であった。認知症患者は、2030年には約110万人という推計されている。このように、韓国は、日本を上回るスピードで急速に高齢化が進展しており、認知症高齢者の支援システムの構築は急務と言える。

本研究では、公益社団法人認知症の人と家族の会(以下、「家族の会」と略す)の活動に焦点をあてて、認知症高齢者支援システムにおけるセルフヘルプ・グループの機能と可能性について考察する。また、韓国認知症家族協会と公益社団法人認知症の人と家族の会の取り組みに焦点をあて、日韓共同活動によるセルフヘルプ・グループの可能性について考察する。

2. 研究の視点および方法

本研究は、韓国認知症家族協会と公益社団法人認知症の人と家族の会を対象に、結成時からこれまでの活動に関する文献をもとに整理し、日韓合同で活動することによる効果に焦点をあてて分析を試みた。

3. 倫理的配慮

本研究は「日本社会福祉学会研究倫理指針」に従い研究を行った。「痴呆症」などの差別的な用語は、旧呼称が用いられた時期や資料に基づき、歴史的用語として使用した。

4. 研究結果

「家族の会」は1980年に、地域医療に携わる医師と認知症の人の家族介護者らによって、京都で結成された全国組織である。「家族の会」は、認知症に関する正しい認識の普及およびその理解の推進、認知症の人とその家族に対する相談及び指導等の支援、認知症に

関する調査及び研究等を行うことにより、認知症の人及びその家族の福祉の推進に寄与することを目的としている（福崎 2018：81-83）。

福崎（2018；47-48）は、「家族の会」の活動をセルフヘルプ・グループの視点から分析している。セルフヘルプ・グループの機能には、〈ボランティア機能〉〈鏡映的自己機能〉〈問題を発見する機能〉〈サポートシステムの機能〉〈情報発信や共有の機能〉〈役割モデル（ロールモデル）機能〉〈グリーフケア（看取り後の支援）機能〉〈資源開発及び資源育成機能〉〈教育および研究機関としての機能〉〈社会改良的機能〉〈サクセスフル・エイジング機能〉があると指摘している。

韓国認知症家族協会は、日本の「公益社団法人認知症の人と家族の会」（旧呆け老人をかかえる家族の会）の活動の影響を受け 1991 年 3 月にソウルで結成された。結成以降、日本の「家族の会」との交流を深めている。1994 年 9 月には国際アルツハイマー病協会（Alzheimer'S Disease International, ADI）に加盟している。

1994 年から電話による認知症相談、1999 年には徘徊救助登録事業、2001 年全国認知症巡回教育を開始し、認知症介護者絵の支援および社会教育活動を積極的に行っている。また、つどいや訪問・SNS を活用した相談支援を行っており、世界アルツハイマーディには、講演会活動やイベントや啓もう啓発活動を行っている。2004 年 4 月には、韓国認知症家族協会の主催で「アジア・太平洋痴呆カンファランス」を開催している。2008 年には、日本国債交流基金ソウル文化センターで映画『折り梅』の上映会を開催している。

2018 年 10 月には、「日韓交流・研修ツアー in 韓国」を韓国で開催し、「日韓共同認知症学術大会 2018」が行われている。

5. 考察

近年、認知症に関する研究や学術集会などを日韓共同活動で開催する機会も増えてきている。しかし、当事者グループによる日韓共同によるセルフヘルプ・グループ活動は始まったばかりであり、日韓合同による活動の機会を増やすことは、当事者主体の政策への反映など認知症支援システムの構築に有効と考察する。また、多様な背景のメンバーが積極的に関わることにより、多様な文化や多様な価値観の融合から生まれる新たな支援システムの構築や、セルフヘルプ・グループ機能の拡大が期待できると考察する。

文献

- ・公益社団法人認知症の人と家族の会編（2018）「韓国痴呆協会 と「家族の会」が交流！」『ぽーればーれ』460, 5.
- ・福崎千鶴（2018）「認知症支援システムにおけるセルフヘルプ・グループの可能性—認知症高齢者と家族介護者のソーシャルワーク実践に関する研究—」（鹿児島国際大学大学院福祉社会学研究科博士論文）。